

# 小学生期における家族との夕食時の会話 ：夕食時の家族メンバーの様態と話題に着目して

岩田 美保\*

千葉大学・教育学部

## Family dinner conversation in elementary school period ：Participants and topics in conversation

IWATA Miho\*

Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究では、大学生を対象に小学生期(小学校後半4～6年生頃)の夕食時の家族の会話への参加者としての、家族メンバーの様態及び、話題、また、その経験をどう捉えているのかについてアンケートに基づき尋ねた。その結果、夕食時の家族メンバーの様態は、平日では家族の誰かが不在であるが、休日では家族が揃う等、平日と休日の夕食時の家族メンバーが異なる状況が多くみられていたことが推察された。また、夕食時の家族メンバーの様態に関わらず、〈趣味〉と〈進路〉の話題のみ、性差による違い(男子>女子)がみられた。一方で、全体としては〈学校授業以外〉、〈放課後〉〈遊び〉、さらに〈学校授業〉、〈食事〉、〈友人〉、〈先生〉についての話題が小学生期の家族との夕食時によく話されていたことが窺われた。経験の捉えとしては、夕食時の家族メンバーの様態に関わらず、それぞれの状況の中で家族との夕食を楽しんでいたとする記述が総じて多くみられた。

キーワード：家族 (Family)、話題 (Topic of conversation)、会話への参加者 (Participant)、  
小学生期 (Elementary school period)、大学生 (University student)

### 問題と目的

親しい関係性においてなされるコミュニケーションの経験は、子どもの社会的な発達や、情緒的な安定などの精神的健康に欠かせないものであり、子どもと家族との間で日々なされる会話はそうした点において、非常に重要な意味をもつといえる。

そうした中で、夕食場面は、家族が一日の終わりに顔を合わせ、その日のさまざまな出来事や情報についてやりとりできる大きな機会の一つであるといえる。しかしながら、近年の、家庭での食生活に関する報告を鑑みると、家族の生活スタイルや、親の仕事の状況、子どもの部活動や習い事等により、食事をいつも家族全員でとることが難しくなっている状況が増加しつつあることが示唆される(足立・NHK「子どもたちの食卓プロジェクト」, 2000; NHK放送文化研究所世論調査部, 2006; 内閣府, 2011)。例えば、足立・NHK「子どもたちの食卓プロジェクト」(2000)の調査では、家族揃って夕食をとるのが、毎日とした回答は全体の15%であったが、週に1～2回とした回答は、30.4%で最も多かった。また、内閣府(2011)の資料にある、厚生労働省「平成21年度全国家庭児童調査」に基づくデータにおいても、毎日家族で夕食をとる割合は、26.2%である一方で、週2～3日が36.2%と最も多い結果であった。こうした状況を鑑みると、夕食をとる家族のメンバーが、親の仕事や、子どもの習い事などのさまざまな予定によって、毎日一

定ではない状況が珍しくなくなっていることが推察される。

一方、こうした家族の会話がどの程度重要と考えられ(重要度)、また、そうした会話を行うことが現実にとどの程度満たされているか(充足度)について、内閣府(平成17年度)の調査によると、重要度に関する回答では、2005年では4.37ポイントと、家族の会話が重要であるという認識は比較的高いものに対して、充足度に関する回答では、2005年(3.52ポイント)と、充足度についてはそれよりもやや少ない傾向がみられる。こうした結果からは、多くの家族が家族の会話の重要性を認めつつも、実際に会話を十分に行うことについてはままならないと感じる状況が進みつつある状況が示唆される。

筆者はこれまで、小学生の子どもを含む家族の夕食時の会話でのやりとりの事例的検討を行い、日常的な夕食時の会話のメンバーの違いによって、話題ややりとりの様相が異なってくることを指摘した(岩田, 2011, 2013)。筆者の研究対象となった家庭においては、概ね平日は母子間、休日は家族全員(父子間)で夕食がとられていた。こうしたやりとりの中で特に、自他の感情がどのような文脈で語られているかに着目したところ、休日を中心とする父子間(家族全員)では食事の好みやマナーに関する会話文脈で自他の感情がよく話される傾向があったが、母子間では、自他の回想や人の内的状態に関わる会話文脈で自他の感情が話される傾向があった。すなわち、自他の心の理解に関わる会話は、平日を中心とする母子間において、よりなされているといえたが、休日を中心とする家族全員の会話では、目の前の食事やマナーの話題を通して自他感情が語られる中で社

会規範や価値観の伝承等が行われていることが窺われた。家族間の生活リズムの違いから結果として、こうしたコミュニケーションの多様性が生じることが窺われたことは、興味深いことともいえる。

一方、小学生から中学生にかけての家族の会話の内容を調べた調査研究（岡田，2003）においても、父子間と母子間において、そうした会話の内容に違いがみられることが指摘されている。それによると、親の会話を役に立つ、楽しいと感じている子どもは、父母との会話で「大切にされていると感じる」といった内容が共通して話されている一方で、父親との会話に特徴的な内容として、「知識」や「仕事」など、社会に関わる内容や知的的好奇心に関わるものが話され、母親との会話では、「学校生活」や「友達」など、子どもの身近な生活に関する内容がよく話されていた。すなわち、子どもは日常的にとりうるさまざまな家族間コミュニケーションの中で、社会生活の理解に結びつく多様なやりとりを行っているといえる（Blum-Kulka, 1997）。

こうしたことをふまえると、夕食時の家族の会話への参加者としての、家族メンバーの様態がどのようなものか、また、そこではどのような内容が話され、そうした様態によって、話題の内容が異なるのか、さらに、そうした中での夕食の経験について子どもがどのように捉えているかといった点について調べることは重要といえる。

本研究では、検討の第一段階として、大学生の回顧法によるアンケートへの回答と自由記述を手がかりに、上記の点について検討を行う。大学生による回顧法であるため、不明確な部分も生じ得るが、夕食時の話題等に関わる全体的な特徴をつかむことや、現在小学生に尋ねることでは得られにくい、小学生期の夕食に関わる経験を総じてどのように捉えているかに焦点をあてることが可能になると考えられる。

## 方法

### 1) 研究協力者

首都圏にある国立大学2, 3年生96名（男子33名，女子63名）

教育学部における心理学関係の授業（201X年度及び201X+1年度の同一名の授業）を通じて、「小学生期の家族との夕食時の会話」についてふりかえってもらい、無記名によるアンケートへの記入（性別・学年のみ選択）を求めた。回収率は100%であった。

### 2) アンケート内容

第一に、家族構成及び平日及び休日の夕食時の家族メンバーの様態について尋ねた。第二に、岡田（2003）や、筆者が行った家族の会話での話題（岩田，2011）についての検討結果を参考に、夕食時の話題について、「学校授業」、「学校授業以外」、「放課後」、「趣味」、「遊び」、「食事」、「進路」、「親の仕事」、「社会のできごと」、「友人」、「赤ちゃん時代のこと」、「先生」、「好きな人」、「幼稚園や保育園時代のこと」、「習い事」、「塾」（16話題）について、「よく話した」、「ときどき話した」、「あまり話さなかった」の3件法で尋ねた。さらに、小学生期の夕食のことで思い浮かぶことについて自由記述を求めた。小

学生時代については、4～6年生ごろ（小学校期後半）を想定して記述してもらったようにした。なお、記述は強制ではないこと、また、記入にあたっては、書きたくないことは書く必要はないこと、記述内容については小学生期に誰とどのような会話をしているかについての全体的な特徴を明らかにすることが目的であり、データは研究以外では使用しない旨をあらかじめ伝えた。なお、対象学生の出身地は首都圏を含む関東地方を中心に全国に渡っていると考えられるが、今回は、第一段階の分析であり、全体的な特徴をつかむことを目的としたため、それらの点については特に尋ねなかった。なお対象学生はこれまでの受講内容等から、心理学の基礎的な知識はある程度あり、心理・教育的な視点を一定程度もちながら自らの経験を振り返ることができると考えられた。

### 3) 分析について

全体の記述内容から、平日及び休日に食事をする家族メンバーの様態を元にグループ化し、そこでの会話の内容について検討した。グループ化においては、親一子の世代を基準とし、「平日も休日も全員」、「休日のみ全員」、「平日も休日も全員ではない」の3グループに分類した。「全員」とは、親一子（本人及びきょうだい含む）世代を基準とし、祖父母については、いずれにも含まれる可能性があるものとした。なお、夕食時の話題に関しては、「よく話した」を3点、「ときどき話した」を2点、「あまり話さなかった」を1点として得点化した。自由記述部分については、個人が特定されることのないように配慮した。

## 結果と考察

### 1) 小学生期に平日と休日の夕食時の家族メンバーの様態 (Table 1)

Table1. 小学生期の平日および休日の夕食時の家族メンバーの様態

	平日	%	休日	%
1. 親と子（きょうだい含む）	36	(37.5)	73	(76.0)
2. 親かきょうだいの誰かが不在	38	(39.6)	9	(9.4)
3. 本人ときょうだい	4	(4.2)	1	(1.0)
4. 一人で	3	(3.1)	1	(1.0)
5. 祖父母と親と子（きょうだい含む）	12	(12.5)	12	(12.5)
6. 祖父母と子（きょうだい含む）	3	(3.1)	0	(0.0)
	96	(100.0)	96	(100.0)

小学生期に平日と休日に食事をしてきた家族メンバーの様態について Table 1 に示した。平日では、〈2.親ときょうだいの誰かが不在〉が39.6%、ついで、〈1.親と子（きょうだい含む）〉が37.5%が多くみられ、平日においては、家族が揃って夕食をとるよりも、親や子どものうち誰かが不在である中で夕食をとる状況がより多かったことが窺えた。また、〈5.祖父母と親と子〉という回答も12.5%みられた。一方、休日については、〈1.親と子（きょうだい含む）〉が76.0%と最も多くみられ、次ぐ〈5.祖父母と親と子〉(12.5%)も含めると、平日とは異なり、家族が一同に揃う中で夕食がとられる状況が多くみられていたことが窺えた。すなわち、平日と休

日では親の勤務やきょうだいの生活時間の違い等から、夕食をとる家族メンバーが異なる状況が多くみられていたことが推察される結果といえた。

2) 夕食時の家族メンバーの様態 (平日/休日)・性別ごとの話題の違い

上記の夕食時 (休日・平日) の家族メンバーについて、「平日も休日も全員」、「休日のみ全員」、「平日も休日も全員ではない」の3様態に分類した。また、話題におい

ては、「習い事」と「塾」の話題について、「それらの経験がない」という回答が複数みられたため、それらの話題を分析対象から除外した。その上で、話題ごとにそれらの様態及び性別を独立変数とし、夕食時の各話題の特点を従属変数とする2要因分散分析を行った。その結果、すべての話題において、有意な交互作用はみられなかったが、〈趣味〉および〈進路〉の話題においてのみ、性別の主効果が有意であり (F (1,90) =4.35,p<.05, F (1,90) =5.10p<.05), それら双方の話題について男子の方が女

Table2 夕食時の家族メンバーの様態 (平日/休日)・性別ごとの話題得点

話題	1, 平日も休日も全員 (N=47)		2, 休日のみ全員 (N=38)		3, 平日も休日も全員ではない (N=11)		F 値
	男子 (n=18)	女子 (n=29)	男子 (n=11)	女子 (n=27)	男子 (n=4)	女子 (n=7)	
学校授業	2.44 (0.71)	2.34 (0.67)	2.55 (0.52)	2.26 (0.66)	2.75 (0.50)	2.29 (0.76)	
学校授業以外	2.39 (0.78)	2.66 (0.67)	2.64 (0.51)	2.56 (0.70)	2.50 (1.00)	2.14 (0.90)	
放課後	2.17 (0.79)	2.38 (0.78)	1.64 (0.09)	2.30 (0.78)	2.50 (0.58)	2.43 (0.79)	
趣味	2.33 (0.84)	2.07 (0.75)	2.00 (0.89)	1.93 (0.78)	2.50 (0.58)	1.57 (0.54)	4.35 *男子>女子
遊び	2.33 (0.77)	2.21 (0.77)	2.45 (0.93)	2.41 (0.75)	2.50 (1.00)	1.71 (0.76)	
食事	2.44 (0.78)	2.21 (0.68)	2.09 (0.70)	2.19 (0.79)	2.25 (0.96)	2.29 (0.49)	
進路	2.00 (0.69)	1.66 (0.61)	1.64 (0.67)	1.44 (0.58)	2.00 (0.82)	1.43 (0.54)	5.10 *男子>女子
親の仕事	1.50 (0.71)	1.66 (0.77)	1.55 (0.52)	1.33 (0.68)	1.50 (1.00)	1.14 (0.38)	
社会のできごと	1.89 (0.83)	1.66 (0.77)	1.82 (0.87)	1.59 (0.69)	1.50 (1.00)	1.86 (0.90)	
友人	2.56 (0.71)	2.66 (0.48)	2.64 (0.51)	2.63 (0.69)	2.75 (0.50)	2.14 (0.90)	
赤ちゃん時代のこと	1.61 (0.61)	1.93 (0.75)	1.64 (0.51)	1.78 (0.64)	2.25 (0.96)	1.71 (0.76)	
先生	2.44 (0.78)	2.52 (0.57)	2.55 (0.52)	2.41 (0.64)	2.25 (0.96)	2.14 (0.69)	
好きな人	1.22 (0.55)	1.10 (0.31)	1.09 (0.30)	1.19 (0.56)	1.00 (0.00)	1.00 (0.00)	
幼稚園・保育園時代のこと	1.44 (0.51)	1.62 (0.73)	1.36 (0.67)	1.33 (0.56)	1.75 (0.96)	1.43 (0.79)	

\*p<.05

注1. 習いごとと塾の話題については、それらの経験がないという回答が複数みられたため、分析対象から外した。

注2. 「全員」とは、親-子 (本人及びきょうだい含む) 世代を基準とした。祖父母については、1, 2, 3のいずれにも含まれる可能性がある。

注3. 家族メンバーの様態×性別の2要因分散分析の有意な主効果がみられた場合のみ結果を示した (得点範囲1-3)。

Table 3 各話題について夕食時にどのくらい話したか (対象者全体)

話題	1 (よく話した)		2 (ときどき話した)		3 (あまり話さなかった)		
	n	%	n	%	n	%	
学校授業	45	(46.9)	42	(43.8)	9	(9.4)	$\chi^2(2)= 24.94, ** 1,2>3$
学校授業以外	63	(65.6)	22	(22.9)	11	(11.5)	$\chi^2(2)= 46.94, **1>2,3$
放課後	44	(45.8)	32	(33.3)	20	(20.8)	$\chi^2(2)= 9.00, * 1>3$
趣味	32	(33.3)	37	(38.5)	27	(28.1)	$\chi^2(2)= 1.56, ns$
遊び	48	(50.0)	28	(29.2)	20	(20.8)	$\chi^2(2)= 13.00, **1>2,3$
食事	39	(40.6)	41	(42.7)	16	(16.7)	$\chi^2(2)= 12.06, ** 1,2>3$
進路	9	(9.4)	45	(46.9)	42	(43.8)	$\chi^2(2)= 24.94, ** 1<2,3$
親の仕事	11	(11.5)	24	(25.0)	61	(63.5)	$\chi^2(2)= 42.07, ** 1<2,3$
社会のできごと	19	(19.8)	30	(31.2)	47	(49.0)	$\chi^2(2)= 12.44, * 1<3$
友人	64	(66.7)	25	(26.0)	7	(7.3)	$\chi^2(2)= 53.07, ** 1,2>3$
赤ちゃん時代のこと	14	(14.6)	48	(50.0)	34	(35.4)	$\chi^2(2)= 18.25, ** 1<2,3$
先生	50	(52.1)	38	(39.6)	8	(8.3)	$\chi^2(2)= 29.25, ** 1,2>3$
好きな人	3	(3.1)	7	(7.3)	86	(89.6)	$\chi^2(2)= 136.95, ** 1,2<3$
幼稚園・保育園時代のこと	8	(8.3)	29	(30.2)	59	(61.4)	$\chi^2(2)= 41.07, ** 1,2<3$

\*\* p<.01,\*p<.05

子よりもより家族間で話す傾向が高かったことが窺われた (Table 2)。

そうした結果をふまえ、夕食時の各話題についてすべての家族間でどれくらい話されたかについて総合的に捉えるために、夕食時の家族メンバーの様態及び性別を含めた対象者全体において、各話題がどれくらい話されたかについて、頻度ごとの人数を示した (Table 3)。各話題ごとの頻度に違いがみられるかについて、 $\chi^2$ 検定を行ったところ、総じて、〈学校授業以外〉、〈放課後〉〈遊び〉については、〈よく話した〉という回答が他の二つの回答 (〈ときどき話した〉、〈あまり話さなかった〉) に比べて多くみられる傾向にあり ( $\chi^2(2)= 46.94, p<.01, \chi^2(2)= 9.00, p<.05, \chi^2(2)= 13.00, p<.01$ ) それらの話題が、家族との

夕食時において日常的によく話されている話題であることが窺われた。また、〈学校授業〉や、〈食事〉、〈友人〉、〈先生〉についての話題も、〈よく話した〉と〈ときどき話した〉が〈あまり話さなかった〉という回答に比べて多くみられる傾向にあり ( $\chi^2(2)= 24.94, p<.01, \chi^2(2)= 12.06, p<.01, \chi^2(2)= 53.07, p<.01, \chi^2(2)= 29.25, p<.01$ )、上記と合わせ、家族との夕食時に比較的良好に話される話題であったことが推察される。一方で、〈好きな人〉、〈幼稚園・保育所時代のこと〉については「あまり話さなかった」とする回答が他の二つの回答よりも多い傾向にあり ( $\chi^2(2)= 136.95, p<.01, \chi^2(2)= 41.07, p<.01$ )、いずれも、家族の夕食時においてはあまり話されなかった話題であったことが窺われた。

Table4 「小学生期の夕食のことで思い浮かぶこと」(自由記述内容例)

【平日も休日も家族全員】
[A1] 子どもたちが良く話す。母の手料理、大好きな時間。(箸の持ち方などしつけも。)
[A2] 会話の内容はその日の学校の出来事、クラブや習い事。将来や恋愛などは話していない。父が会話を楽しもうという考え方だったので、たくさん会話した。
[A3] 家族での食事がとても楽しみだった。特にクラブのことを話しているのが楽しかった。習い事の話は苦手だった。
[A4] 夕食時の会話で両親はいろいろなことを察知していたと思う。いつもより口数が少ないと、今日なんかあったの?ときいてきたりした。
[A5] 今もだが、一日の出来事、気になっていること、最近感じたことをよく話す家族。両親ともに職場であったおもしろい話をたくさんしてくる、全体的に愚痴はあまりないので、きいていて苦痛にもならない。
[A6] 父は家の近くで勤務、夕食は皆で食べるために帰ってきてくれた。今思えばありがたい。
[A7] 親が学校についてあまり興味をもっていなかったため、あまり話さなかった。親同志が仕事の話をするときも多い。
[A8] 弟がよく話すので、自分は合の手をいれる感じ。今も弟はよく話す。
[A9] 父の経営する** (省略)に通っていたのでその話が多かった。両親共働きで夕食の時間は遅かったが全員で食べていた。
[A10] 私と妹が話している時間と同じくらい、親 (特に父) と祖父母が話す時間もあった。
[A11] 祖父母とは二世帯住宅なので普段は別 (食事の時のみ一緒)。テレビの内容 (そのときのものや以前やっていたもの) について話した。その中でほかの話をしたり、わりと自由だった。
[A12] あまり会話をした記憶がないが、両親と妹と自分 (祖父母以外) のときは割と話した。
【休日のみ全員】
[B1] 基本的に夕食時は良く話していた。学校でその日にあったことをすべて家族 (特に母) に話していた。父がいる休日はちょっと話しづらかったが、平日の夕食の団らんの時間は一番のリラックスタイムだった。
[B2] 両親が共働き、平日は祖父母と妹、という周りと生活が違っていたので、多少なりとも影響は受けていると思う。祖父母とは年齢もはなれているため、テレビをみながら、プロ野球の話などが多かった。
[B3] 祖父母と一緒にいるときが多く、経験談を聞く機会や社会状況の話題がとても多かった。父母に会えるのは休日と塾の送迎、車内ではよく話した。
[B4] 祖母が主に話していて、祖母の間話が多い。子どもは質問されたときにメインに話題になったりしたが、常に子どもと母が話すというイメージは少ない。
[B5] その日あったことなどを特に多く話した。学校の話が主。父が入ると仕事や社会の出来事、親類の話が多くなった。
[B6] (平日は) 自分が良く話すというよりも、親が話をきいてくれるという雰囲気がとてもあった。話すことに困ったことはなく、いつも笑いと話し声であふれていた。
[B7] いとこたちと祖母の家で食べるときは学校の話をよくした。
【休日も平日も全員ではない】
[C1] 父が単身赴任で、全員そろうのは週2日くらい。父が帰ってきたときの夕食は記憶にあり、楽しかった。
[C2] 習い事や帰宅時間がバラバラだったが、家の食事が好きで外食はしない。
[C3] 母や兄といろいろな話をしていた。父の帰りは遅かったが、母から父のおかげで生活できていると良くいわれていたため、不満にもならなかった。
[C4] 妹と自分が話していると家族が入ってくる形。妹も自分も家族が笑っていたり、楽しい雰囲気が好きだったので、積極的におもしろい話をするようにしていた。
[C5] 夕食は同時にとらなくても、リビングに誰かいて一人ではない。きょうだいも多くにぎやか。上の兄の学校の話には興味あり。
注1. 「全員」とは、親-子 (本人及びきょうだい含む) 世代を基準とした。祖父母については、1, 2, 3 のいずれにも含まれる可能性がある。
注2. それぞれの様態別の記述内容において代表的なものを示した (食事中テレビをつける/つけないに関わる記述および、食事のマナーに関わる記述は分析対象外とした)。
注3. 小学校期後半 (4~6年生) の頃を想定した記述を求めた。

### 3) 「小学生期の夕食のことで思い浮かぶこと」についての自由記述の内容

Table 4には、「小学生期の夕食のことで思い浮かぶこと」についての自由記述の内容(夕食時の家族メンバーの様態別)について、代表的な内容を示した。自由記述の内容は総じて肯定的なものであった。

【平日も休日も家族全員】では、子どもたちや家族、また両親がよく会話しており、それを直接、間接的に楽しんでいたとする内容がほぼ共通してみられた(A1, A2, A3, A5)等。また、夕食のために父が毎日帰宅してくれていたとする記述(A6)や、両親が、食事の機会に子どもの様子を察知しており、口数が少ないと声をかけてきてくれた(A4)等、そうしたやりとりを維持する上での親側の努力や配慮への感謝について言及する内容もみられた。一方、家族全員が揃っていたとしても、全員がいつでも良く話すというわけではないといえる。きょうだいの一人がよく話していたので、自分は合いの手を入れる感じであるといった記述(A8)や、親同士が学校よりは仕事の話をするときも多いといった記述(A7)、父の経営する\*\*\*(省略)に通っていたので、その話が多かったといった記述(A9)、本人と妹が話していた時間と同じくらい、父と祖父母が話す時間があつた等、そこでの会話の内容や話者については、家族の状況や特性に応じた多様性があることが窺われる。特に、祖父母を含む会話(A10, A11, A12)では、話題性やコミュニケーションのあり方が親子間の会話とは異なるものとなりうるということが推察されることは興味深いものといえる。

【休日のみ全員】では、総じて、休日と平日の夕食時の家族様態が異なることや、そうした形(B4)や、祖父母とプロ野球の話(B2)、いとこと学校の話(B7)、等にふれたり、それを楽しんでいたとする記述がほぼ共通してみられたことが特徴的であった(B1, B2, B3, B5, B7)。他方で、平日には母子間で、その日にあつた出来事を話すことが(休日の父等を含む会話とは異なる)くつろぎ(リラクセス)の時間であったとするような記述もみられたことももう一つの特徴といえた(B1, B6)。

【休日も平日も全員ではない】では、父の単身赴任や、生活時間の違いにより、家族全員はなかなか揃わない状況ではあるものの、揃ったときの楽しさや、家の食事が好きであること、また、父への感謝から、不満は特になんといったことが挙げられていた(C1, C2, C3)。また、食事は同時ではないものの、近くに(リビングなど)家族の誰かがいて、にぎやかなコミュニケーションが交わされるのが常であったとする記述(C4, C5)も特徴的といえた。

#### まとめと今後の課題

総じて、本研究では、大学生を対象に、小学生期(小学校後半4~6年生頃)における夕食時の家族の会話への参加者としての、家族メンバーの様態がどのようなものか、また、そこではどのような内容が話され、さらに、そうした中での夕食の経験をどのように捉えているかについ

てアンケートに基づき尋ねた。その結果、夕食時の家族メンバーの様態は、平日では、親やきょうだいの誰かが不在である中で、また、休日では家族が揃う中で夕食をとっていたとした回答が多くみられ、平日と休日において、夕食をとる家族メンバーが異なる状況が多くみられていたことが推察された。

また夕食時(休日・平日)の家族メンバーについて、「平日も休日も全員」、「休日のみ全員」、「平日も休日も全員ではない」の3様態に分類し、性差も含めて話される話題の違いがみられるかどうかについて検討した結果、〈趣味〉および〈進路〉の話題のみ、性差による違い(男子>女子)がみられたものの、家族メンバーの様態による違いはみられなかった。一方、夕食時の家族メンバーの様態及び性別を含めた全体の中で各話題がどれくらい話されたかについてみてみたところ、総じて、〈学校授業以外〉、〈放課後〉〈遊び〉、さらに、〈学校授業〉や、〈食事〉、〈友人〉、〈先生〉についての話題は小学生期の家族との夕食時において日常的によく話されていた話題であることが窺われた。他方で、〈好きな人〉、〈幼稚園・保育所時代のこと〉については、あまり話されなかった話題であったことが窺われた。

また、家族メンバーの3つの様態別に、それらをどのように捉えているか(思い浮かぶこと)についての自由記述では、【平日も休日も家族全員】では、家族がよく会話してそれを楽しんでいたという内容がほぼ共通して見られた一方で、そこでの会話の内容や話者については、家族の状況や特性に応じた多様性があることが窺われた。【休日のみ全員】では、総じて、休日と平日の夕食時の家族様態が異なる中で、それを楽しんでいたとするような記述が特徴的であった。【休日も平日も全員ではない】では、生活時間の違い等により、家族全員はなかなか揃わない状況ではあるものの、揃ったときの楽しさや、食事は同時ではないものの、コミュニケーションの機会は確保されていることが窺える記述が特徴的といえた。

今回の分析では、夕食の家族メンバーの様態を3種類に分けて主に検討を行ったが、夕食をとる家族の様態が非常に多様であることが窺えたため、今後はそれらをより詳細に捉え、分析を行う必要がある。また、少なくとも3世代を含む会話においては、話題性や、誰が話すかといったことを含むコミュニケーションのありようが親子間(2世代)の会話とは異なってくることも推察された。それらの様相を捉える試みも今後の課題といえる。他方で、〈趣味〉および〈進路〉の話題のみではあつたが、性差による違い(男子>女子)がみられたことは興味深い点である。小学生期の家族の夕食時の話題において、性差がみられるか、みられるとしたら、どのような性差がみられるのかという点については、今後も慎重に検討していく必要がある。

さらに、今回夕食時について回想してもらつた中で、回答を求めたが、現代の家族の生活時間がさまざまである状況においては、夕食の時間が必ずしも皆が揃い、充実した会話がなされる機会とは必ずしもいえないかもしれない。実際に自由記述においては食事を一緒にとらなくとも、それ以外の状況で家族が楽しくやりとりしている様相が窺えるものもあつた(Table4C5)。また、家族

が揃わない（母ときょうだいといった、比較的小人数）のほうで、日常的な会話がよくできていることを窺わせるような記述もあった（Table4,B 1）。今後は、そうした点を考慮し、より細かく家族の夕食時の様態を捉える中で、それぞれの会話の内容や特徴の違いを明らかにしていく必要がある。また、本研究は、大学生を対象とした小学生期（小学校期後半）の回想に基づく結果であった。それらは、経験の捉えなおしがなされる中での回答が得られるという点で、利点もあるが、小学生期（小学校期後半）からは10年前後の時間が経過しているため、その回答内容については限界もある。今後は、児童期の子どもに対してこうした調査や、観察などを行い、コミュニケーションを含む家族間の会話の実態を捉えていくことが必要である。

### 付記

本研究は平成30年度科学研究費基盤研究（C）（研究代表者 岩田美保）の助成を受けて行われた。

### 引用文献

- 足立己幸・NHK「子どもたちの食卓プロジェクト」  
2000 知っていますか子どもたちの食卓 食生活からからだと心がみえる。NHK出版。
- Blum-Kulka 1997 Dinner Talk: Cultural Patterns of Sociability and Socialization in Family Discourse. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 岩田美保 2011 学童期のきょうだいをもつ家族の夕食時の会話－母子4者間・父母子5者間で話題となる他者－. 千葉大学教育学部研究紀要, 59, 43-45.
- 岩田美保 2013 母子4者間・父母子5者間で語られるポジティブ・ネガティブ感情：1家族の夕食時の会話の縦断的検討. 日本家政学会誌, 64, 75-88.
- 内閣府 2005国民生活選好度調査（平成17年度）  
<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/senkoudo.html> (2018.9.27にアクセス)
- 内閣府 2011 平成21年度全国家庭児童調査結果の概要  
<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001yivt-att/2r9852000001yjc6.pdf> (2018.9.27にアクセス)
- NHK放送文化研究所世論調査部（編）2006 崩食と放食 NHK日本人の食生活調査から。NHK出版。
- 岡田みゆき 2003 中学生における食事時の親子の会話の実態－親子の会話における小学生から中学生への変化。日本家政学会誌, 54, 3-15.